南陽市埋蔵文化財調査報告書第 17 集

岩屋堂遺跡

2018 年 3 月

南陽市教育委員会

南陽市埋蔵文化財調査報告書第十七集
岩屋堂遺跡
南陽市教育委員会

岩屋堂遺跡

いわやどう

南陽市埋蔵文化財調査報告書第 17 集

平成 30 年 3 月

南陽市教育委員会

岩屋堂遺跡完掘状況（南東より）

岩屋堂遺跡出土遺物（北より）

岩屋堂遺跡出土　縄文晩期小型甕

岩屋堂遺跡出土　縄文晩期赤彩土器

巻頭写真２

序

この度、南陽市埋蔵文化財調査報告書第17集「岩屋堂遺跡発掘調査報告書」を発行する運びとなりました。

本書は、特別養護老人ホームこぶし荘の造成工事に伴い埋蔵文化財保護との調整を図るために南陽市教育委員会が実施した発掘調査の成果をまとめたものです。

岩屋堂遺跡は、市内中川の川樋地区北部に広がる縄文時代の遺跡で、川樋地区北部の岩部山の南西麓に広がる遺跡です。調査は平成27年11月に試掘調査を行い、平成28年５月に本調査を実施しました。

縄文時代の終末の時期を飾る大集落遺跡として岩屋堂遺跡の調査進展は、市内にあったと推定される数多い縄文時代の実態解明のために非常に大切であると考えています。岩屋堂遺跡一帯では開発が急速に進んでおり、今後とも開発との調整を行い、遺跡の保護を確実に実施していくことが必要となります。

本市は、北に丘陵、南に沃野と豊かな自然に恵まれ、旧石器時代から中世に至る多くの遺跡が存在します。土中に埋まっている集落跡や古墳・城館等の「遺跡」と、石器や土器等の「遺物」は「埋蔵文化財」といいますが、これらは市内の至る所に眠っています。

現代に生きる私たちは、埋蔵文化財を大切にし、やむを得ず破壊される場合は、記録として保存し、歴史を後世に引き継いでいく責任があります。

結びに、本調査にご指導とご協力をいただいた佐藤鎮雄先生、佐藤庄一先生をはじめとする関係各位に、厚く感謝を申し上げます。

平成３０年３月

南陽市教育委員会

教育長　猪　野　　忠

本書は、特別養護老人ホーム施設の造成工事に係る「岩屋堂遺跡」の発掘調査報告書である。
既刊の概報の内容に優先し、本書をもって本報告とする。
調査は、南陽市教育委員会が実施した。
出土遺物、調査記録類は報告書作成後、南陽市教育委員会が保管する。

調査要項

遺　跡　名	岩屋堂遺跡		
遺跡番号	024		
所　在　地	山形県南陽市川樋字岩屋堂500番2、501番、502番、503番1		
調査主体	南陽市教育委員会		
調査実施機関	南陽市教育委員会社会教育課埋蔵文化財係		
調査期間	平成28年5月15日～5月20日		
発掘調査担当者	社会教育課長	佐藤賢一	
	社会教育課長補佐（兼埋蔵文化財係長）	角田朋行	
	埋蔵文化財係	鈴木輝生	
	嘱託	吉田江美子	
報告書作成担当者	社会教育課長	佐藤賢一	
	社会教育課長補佐（兼埋蔵文化財係長）	角田朋行	
	埋蔵文化財係	佐藤祥一	
	嘱託	吉田江美子	山田　渚
調査指導	山形県教育庁文化財・生涯学習課	佐藤鎮雄	長井謙治

凡　　例

1　本書の執筆は、Ⅰ～Ⅲは吉田江美子、遺物写真撮影は山田渚が担当した。Ⅳ－１は長井謙治（東北芸術工科大学）に依頼した。

2　遺構図に付す高さは海抜高で表す。方位は真北を示す。

3　遺構実測図の縮尺は各図に示し、各々スケールを付した。遺物実測図は 1/3 で採録している。

4　写真図版は任意の縮尺で採録した。

5　発掘調査及び本書を作成するにあたり、下記の方々からご協力、ご助言をいただいた。（敬称略）

　　佐藤鎮雄　　佐藤庄一　　小林圭一　　菅原哲文　　長井謙治

6　委託業務は下記の通りである。

　　放射性炭素年代測定　　山形大学　YU-AMS グループ

　　木材樹種同定　　株式会社パレオ・ラボ

目　次

Ⅰ　調査の経緯 …… 1
　1　調査に至る経過 …… 1
　2　調査の概要 …… 1
Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 2
　1　地理的環境 …… 2
　2　歴史的環境 …… 2
Ⅲ　遺跡の概要 …… 6
　1　検出遺構 …… 6
　2　出土遺物 …… 6
　3　まとめ …… 6
Ⅳ　理化学分析 …… 15
　1　南陽市岩屋堂遺跡理化学分析調査　15
　2　岩屋堂遺跡出土木材の樹種同定 …… 20

図　版

第１図　岩屋堂遺跡グリッド図 …… 1
第２図　中川地区遺跡位置図 …… 6
第３図　南陽市遺跡位置図 …… 6
第４図　包含層出土遺物（１）…… 7
第５図　包含層出土遺物（２）…… 8
第６図　包含層出土遺物（３）…… 9
第７図　米沢盆地の地形分類と
　　縄文晩期の遺跡分布 …… 12
第８図　岩屋堂遺跡表採遺物 …… 13

表

表１　遺跡位置図 …… 4
表２　遺物観察表（１）…… 10
表３　遺物観察表（２）…… 19

写真図版

巻頭写真１　岩屋堂遺跡完掘状況
　　岩屋堂遺跡出土遺物
巻頭写真２　岩屋堂遺跡出土　縄文晩期小型甕
　　岩屋堂遺跡出土　縄文晩期赤彩土器
写真図版１　岩屋堂遺跡完掘状況
写真図版２　面整理作業状況
　　遺物出土状況
写真図版３～８　包含層出土遺物（１）～（８）

Ⅰ　調査の経緯

1　調査に至る経過

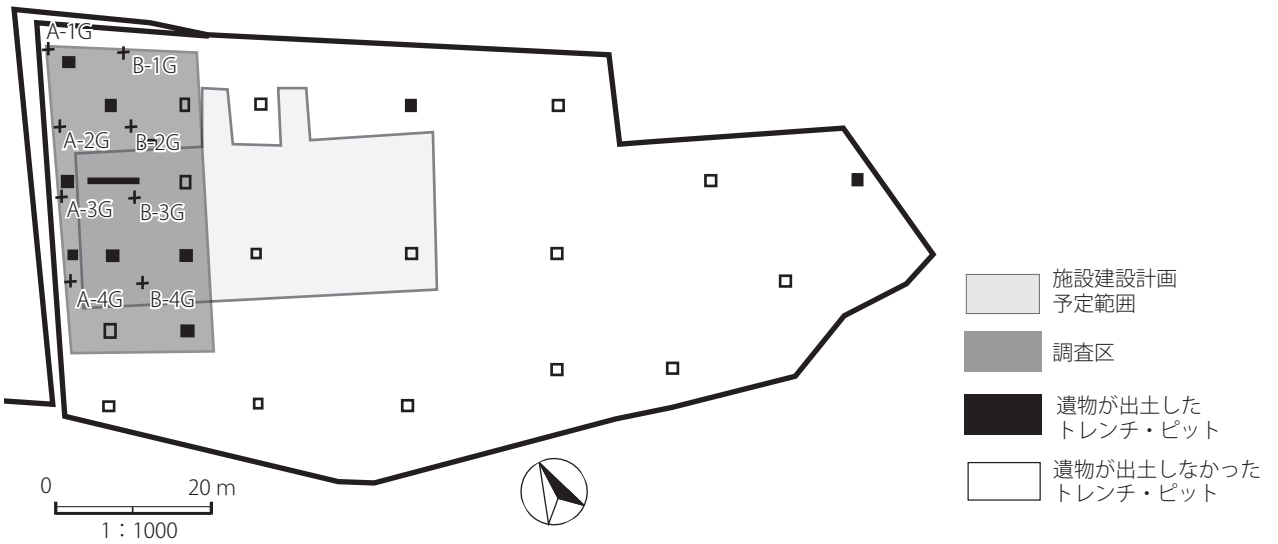
岩屋堂遺跡は南陽市の東端の川樋地区に所在する。岩部山から鷹戸山に続く南側の小扇状地の緩斜面上の標高 290m に位置する。対象地を含む一帯は以前から広範囲で土器や石器の散布がみられ、畑地・水田として利用していた際、耕作土中から縄文時代晩期の遺物が出土していたことにより、この遺跡の存在は周知のものであった。今回の調査は特別養護老人ホームの施設の造成工事にともなう緊急発掘調査（民間受託事業）として実施された。

事業計画に先行して、平成 27 年 11 月 6 日から 9 日にかけて遺跡範囲の可能性がある開発予定地の約 4,100m² について南陽市教育委員会が試掘調査を行った。試掘調査では 20m 間隔で 1m × 1m の試掘抗 18 か所を設定して手堀で試掘調査を行ったところ、明確な遺構は確認出来なかったが、西端部分の試掘抗に土器の出土の集中がみられた。本調査の範囲を確定するため、西端部分に 11 か所のトレンチおよび試掘抗を追加して、計 27 か所の試掘抗とトレンチを手堀により調査した。その結果、開発予定地の西端の東西 20m ×南北 40m、800㎡の記録保存を必要と思われる範囲について、翌 28 年市教育員会が本調査を実施した。

2　調査の概要

岩屋堂遺跡本調査は、前年の試掘調査の結果を基として重機による表土除去を行い、その後粗掘りおよび面整理作業を行った。その際 A-3 ～ B-4 グリッドにかけて遺構確認面とした面の直上の包含層からは大量の縄文土器が出土していたが、遺構面と思われる層には遺構は確認されなかった。

5 月 15 日～	重機による盛土除去
5 月 15 日	資材運搬、テント設営、環境整備
5 月 15 日～	粗掘りと並行し、面整理
5 月 20 日	全体清掃、完堀写真撮影、資材撤収



第 1 図　岩屋堂遺跡グリッド配置図

Ⅱ　遺跡の立地と環境

1　地理的環境

南陽市は山形県の南部にある米沢盆地の北に位置し、東西 15㎞・南北 24㎞三角形状の市域を呈し、市の面積は約 160k㎡である。周囲は山々に囲まれ、東に奥羽山脈、南に吾妻連峰、北に白鷹丘陵、南西に飯豊連峰、北西に朝日連峰を望む。年間や一日の寒暖差が大きい盆地特有の内陸型気候で、積雪も比較的多く、年間降水量は 1,500㎜前後である。市の面積のうち北側の 70％の山地と南側の 30％の平地で構成されており、北端の白鷹山（標高 994 m）の麓を水源とする吉野川は市内を南方向に貫流し市の南端の宮崎地区で最上川に合流するが、その堆積作用により市南西部の宮内・沖郷地区に広がる大きな扇状地が形成された。加えて吉野川に比較的近距離にある宮内地区を南流する上無川と織機川とともに複合扇状地を形成し、これを「宮内扇状地」と呼称し、近世においては上杉氏の奨励によって新田開発が進んだ。また南東部には約 1000ha にも及ぶ泥炭層が堆積する大谷地低湿地が発達し、その名残りとして白竜湖が残っている。白竜湖大谷地では縄文前期から集落が作られ、泥炭層に「真空パック」された漆塗製品をはじめ当時の遺物が大量に出土した押出遺跡がある。このような南陽市の景観は「北に丘陵、南に沃野」と表現されている。

岩屋堂遺跡は南陽市の東端で上山市境にも近い中川地区に所在する。鷹戸山の南面に「岩屋堂」という洞窟があり、その緩傾斜地一帯を岩屋堂の地名で呼称されているが、洞窟や周辺の広い範囲で大量の土器や石器類が散布し、これまでも表採されている。遺跡の南側を南流する前川とその支流によって形成された扇状地の上に立地するが、標高は約 290 m で、南北約 4 ㎞と小規模でやや急傾斜の扇状地である。ＪＲ奥羽本線中川駅から西へ約 1 ㎞の地点にあり、また国道 13 号線が遺跡の南側を縦走するなど現代の交通の要所に隣接している。慶長年間頃からすでに参勤交代のため米沢街道と小岩沢に宿駅などが設置され、人や物の往来に利用される重要な街道であり、近年まで主要道路として利用されていた。遺跡の北西側の背後にそびえる岩部山や鷹戸山は巨大な花崗岩の岩肌が露出し、その地域周辺も花崗岩類の岩層によって覆われている。中川地区の良質な凝灰岩は石材として採掘され、その石切場跡も残る。また岩部山には天保年間の大飢饉の際、凶作や社会不安に苦しむ人々のため金毛和尚が私財を投じ村人や石工の協力を得ながら、その岩肌に三十三体の観音像を彫らせ観世音菩薩に苦しむ人々の救済を願ったとされ、この「岩部山三十三観音」は現在も毎年例祭が行われるなどその信仰は続いている。（1991 菊地・前田ほか）

今回調査した部分については現在特別養護老人ホームの敷地として使用されている。

2　歴史的環境

南陽市では平成 28 年度末現在で 288 箇所の遺跡が確認されている。南陽市は、吉野、宮内・金山、漆山、梨郷、沖郷、赤湯、中川の 7 地区に区分されており、ここでは中川地区を中心に述べる。

縄文時代

岩屋堂遺跡が所在する中川地区で確認されている最古の遺跡は縄文早期の土器が出土している天矢場遺跡となるのであろうが、出土遺物の主体を基準とするならば最も早くなるのは縄文前期～中期頃の諏訪原Ｃ遺跡であろう。遺跡からは石鏃、石錐、石箆などの石器が採集されている。

縄文中期に入ると遺跡数が全国的にピークを迎える。特に山形県では圧倒的に中期の遺跡が多く、南陽市および中川地区も同様であった。昭和 30 年前半開墾中に発見された元中山日影遺跡は、土器や石器から縄文時代中期（大木８ｂ・９式）～後期に位置付けられている。小岩沢遺跡についても石鏃など石器を中心に約 500 点が収集され、縄文時代中後期（大木９・10 式～後期前葉）とされている。日向遺跡では昭和 40 年頃土採集作業中に発見され、出土した縄文土器

や石斧などから中期の大木９式に属するとみられる。近年の発掘調査においては、天矢場遺跡で陥穴が４基確認されたとともに石鏃や中期中葉を中心に早期～後期の土器が出土したことから狩猟場の一部であったと推測されている（2009 須藤・氏家・伊藤）。

縄文後期になると気候の寒冷化により著しく遺跡の数は減少するが、中川地区では前川流域に遺跡が存続し、むしろ遺跡数は増加する。諏訪原Ａ遺跡は石を移動させた際その下から縄文土器や石器が出土したことから縄文後期とされている。諏訪原Ｂ遺跡は道路拡張の際に縄文土器や石器が発見されそれらから縄文後期に位置付けられる。長次郎遺跡は散布地で縄文土器と石器、ハチの巣石も発見され、土器は縄文時代後期（新地４式）とみられる。近年の発掘調査においては、加藤屋敷遺跡では中央に石組の炉をもつ竪穴住居跡が確認され、出土した土器から縄文後期後葉に属する住居とみられる。また石匙や削器などの石器・石製品が29 点出土している（2009 氏家・伊藤）。

縄文晩期になると気候の寒冷化がピークとなり、全国的に遺跡はさらに減少するが、中川地区も例外ではない。南陽市全域に広げても吉野川上流の石畑遺跡など山地や山麓の約９遺跡が発見されるにとどまる。出土遺物においては植物性食料を採集・加工するための道具は減り、狩猟具や漁労具などの動物性食料を採取する道具の割合が増えるという変化がみられる。岩屋堂遺跡と加藤屋敷遺跡は、中川地区では縄文晩期に属する遺跡である。岩屋堂遺跡は畑の耕作中に縄文土器や石器が出土し、それらから縄文晩期（大洞Ｃ１・Ｃ２・Ａ式）に位置付けられている。岩屋堂遺跡周辺で出土する石鏃の大部分が有茎石鏃であることから、食生活は小さく強力な弓矢を使用した狩猟活動に依存するようになったことを示している。前川を挟んで東側にある小岩沢遺跡（縄文中期後期～後期前期）から出土した石鏃の比率は無茎石鏃２に対し有茎石鏃１と、その違いは明確である（1990 佐藤）。また岩屋堂遺跡周辺からは朱塗りの土器が発見されている。

古墳時代

南陽市南部では、稲荷森古墳をはじめとして、旧吉野川や織機川流域周辺や蒲生田山丘陵などで数多くの古墳時代前期の古墳・古墳跡が確認されている。しかし中川地区では加藤屋敷で方形に巡る溝が確認されているのみであり、遺物など年代を示す遺物は出土していない（2006 氏家・伊藤）。

古代

８世紀～９世紀末に属する整然と配置された掘立柱建物群の遺跡や条里制が確認され郡衙の存在が想像されている南部の宮内扇状地周辺と比較すると、中川地区における古代の遺跡は非常に少ない。しかし、加藤屋敷遺跡で８世紀第４四半期から９世紀後半に属する遺構および遺物が確認されている。遺構では竪穴住居跡６棟（うち１棟は焼失家屋）、合口甕内に黒色土器の坏を納めたものを埋納した祭祀遺構１基が確認されている。遺物では須恵器、土師器、黒色土器、木製品などが出土しているが、特徴的なのは「王仁」「他田」「物」など集団名を記したと思われるものを含む 60 点余りの墨書・刻書土器である。河川跡から多数の椀や皿、曲物などの食器用木製品、祭祀に使用されたと思われる顔が彫られた木製人形などが出土しており、氏族集団が集落を営んでいたと思われる。（2006 氏家・伊藤）。また小岩沢墳墓は高さ約５ｍの方形の墳丘中腹に石槨があり、平安時代の須恵器の蔵骨器が出土したといわれているが、現在は所在不明である。なお、天矢場遺跡では須恵器の破片３点が出土しているのみである（2006 須藤・氏家・伊藤）。

中世

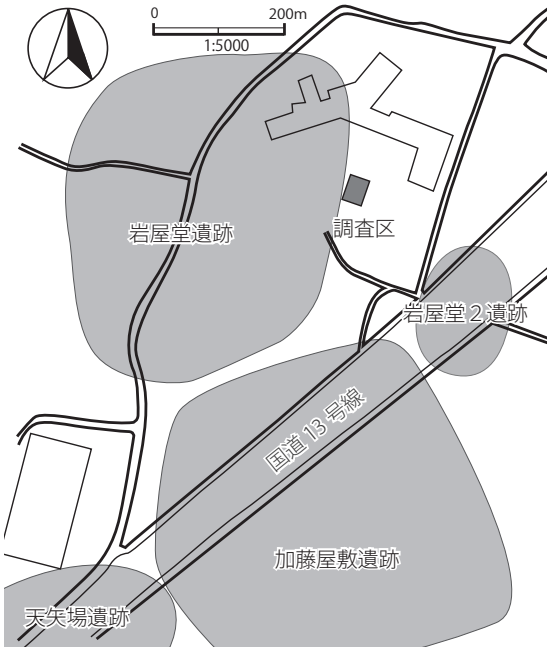
置賜地方における中世の城館跡について、中世城郭遺跡の割合を山城と平城の割合を比較した場合、米沢市・高畠町・西川町では山城２割：平城８割となるに対し、南陽市の場合、山城５割：平城４割と様相に違いが出てくる。特に中川地区は伊達領と最上領を繋ぐ重要な幹線道路の米沢街道が縦走し、伊達氏としては常時軍事的に緊張を強いられていた。戦国時代には街道両脇の山や丘など自然地形を利用した山城が多数築城されたとみられる。

中川地区の館跡の築城者・築城時期が不明のものがほとんどであるが、その中でも代表的な館跡は東西 1.7㎞南北 0.7㎞という広い城域をもつ岩部山館

（月見館）である。標高 506m の山頂から一部北斜面にかけてを範囲とし、山頂に造られた 50m × 30m の東郭を主郭として、東・西・北の 3 郭群が造られた。最上領に最も近く防御を目的に築城された中山城（上山市中山字上郭）を意識して中山城側の南側と東側に土塁を築き防御を意識しているとみられ、また東郭の眺望の良さから物見の機能を有した山城であろう。その一方では麓の集落の住民の逃げ場になっていたと思われる。虚空蔵山館（星見ヶ城）は城域が長軸 450m ×短軸 100m、比高差 160m、円錐形を呈する山城で、麓に根小屋をもつことから、規模と構造は戦国期の特徴をもつ。しかし東郭は近代にブドウ園として開拓されているため当時の地形を留めているかは不明である。日影館は集落内の小高い丘陵上に築城され、主郭は 30m × 40m だが曲輪によって二つに区切られている。大洞山館は比高 110m、城域は長軸 200m 短軸 50m、主郭は中央が凹む地形で長軸 88m、14m の楕円形である。中野森館は比高 40m、東西 200m、南北 185m の丘の上に造られた小規模な山城である。戦後の開発のため採土されたり果樹園として開墾されたため遺構の一部は消失した。館平館は長軸 170m 短軸 80m の小規模な山城であったが現在は果樹園として開墾されている。川樋館は中川地区で唯一の平城で、規模は長軸 210m 短軸 100m である。（1995 加藤・手塚ほか、2012 佐藤）

近世

寛永 12（1635）年の参勤交代制の確立とともに諸街道が充実し、中川地区を通る米沢街道も整備され、小岩沢・川樋に宿駅が配置された。そして宮内村・熊野神社の門前町は商人をはじめ人と物が集まり繁栄した。彼ら商人たちは米・塩・綿・海産物、青苧、紅花等の商品となる荷物を運んでいたが、米沢街道では通過する宿駅ごとに鞍下銭の支払いや、通行手形などの制約が負担となった。そこで商人たちは米沢街道を避け、宿駅のない脇街道の小滝街道や山道（釜渡戸道）を使用するようになったため、小岩沢・川樋・赤湯の宿駅が衰微し、奉行所へ脇街道への荷物のさし止めの請願や賃下げを行ったが効果は薄かったらしく、米沢街道の宿場は衰退していったようである (1991 菊地・前田ほか)。



第２図　中川地区遺跡位置図（詳細）

表１　南陽市遺跡位置図

番号	遺　跡　名	種　別	時　代
1	岩屋堂	集落跡	縄文（晩期）
2	日影館	城砦	中世
3	元中山日影	集落跡	縄文（中・後期）
4	諏訪原Ｄ	一字一石経塚	江戸（寛延元年）
5	諏訪原Ｂ	散布地	縄文 (後期)
6	岩部山館	城砦	中世
7	諏訪原Ｃ	集落跡	縄文（前～中期）
8	諏訪原Ａ	集落跡	縄文（後期）
9	砂利山	古墳	奈良
10	天矢場	狩猟場・集落跡	縄文、奈良～平安・中世
11	加藤屋敷	集落跡	縄文、奈良～平安・中世
12	岩屋堂２	散布地	平安
13	虚空蔵山館	館	中世
14	川樋館	館	中世
15	館平館	館	中世
16	館平	散布地	縄文
17	小岩沢墳墓	墳墓	平安
18	小岩沢	集落跡	縄文（中・後期）
19	長次郎	散布地	縄文（後期）
20	日向	散布地	縄文（中・後期）
21	北沢	散布地	縄文
22	一ノ倉山	散布地	縄文
23	中野森館	館	中世
24	大洞山館	館	中世
25	銀山	散布地	平安
26	十分一山	集落跡	縄文（中・後期）

（国土地理院発行 2 万 5 千分の 1 地形図「羽前中山」「赤湯」使用）
平成 29 年 4 月 1 日現在
第 3 図　南陽市遺跡位置図

Ⅲ　遺　跡　の　概　要

1. 検出遺構

今回の調査区は特別養護老人ホーム施設の造成工事に伴い、開発用地が岩屋堂遺跡の範囲内と思われることから、平成 27 年 11 月に試掘調査を行った。その結果調査区西端の試掘抗および試掘トレンチから縄文土器が出土したため、翌年平成 28 年 5 月に本調査を実施した。調査区は遺物が出土した範囲の南北 40m ×東西 20m の長方形の範囲である 800㎡とした。調査区は 10m グリッドで東西方向は A ～ B、南北方向は 1 ～ 4 と番号を付した。

表土剥ぎ･面整理を行ったが､遺構は検出されなかった。しかし、調査区南側で東西に走る小河川状の細長い地形が確認された。

2. 出土遺物

小河川状の地形部分にあたる A-3G ～ B-4G 部分を中心に包含層から多量の縄文土器が出土したが、石器の出土はなかった。また、1 点小型深鉢がほぼ完形で出土した以外は破片の出土がほとんどであった。

出土した土器のうち図化できたのは合計 80 点で、器種は深鉢、浅鉢、小型土器、壺、注口土器である。なお、この遺跡で出土している土器は縄文晩期の土器の中のひとつである「大洞式」に属し、精緻な文様を特徴としている。

ほとんどが破片であるため文様が不明確であり時期決定が難しいが、土器形式から縄文晩期の大洞 C1 ～ C2 式を中心として、縄文後期後葉～晩期後葉（大洞 A 式期）の範疇にある土器が出土している。

土器はまず以下の 2 種類に大別される。

1．精製土器

2．粗製土器

ただし、破片の実数は粗製土器が圧倒的に多いのだが、図化できた土器は精製土器が多く、実測図に偏りが生じた。

また文様を分類すると以下のようになるが、詳細は遺物観察表に記した（表３・４）。

1. 羊歯状文（６図４・17）

2. 二溝間の截痕（５図３、６図５、７図 23）

3. 条線文（５図８）

4. 沈線による並行文や斜行文

5. 器面が縄文のみ

6. 無文

また、土器の塗布物について、

1．漆（４図３、５図３、６図 12）

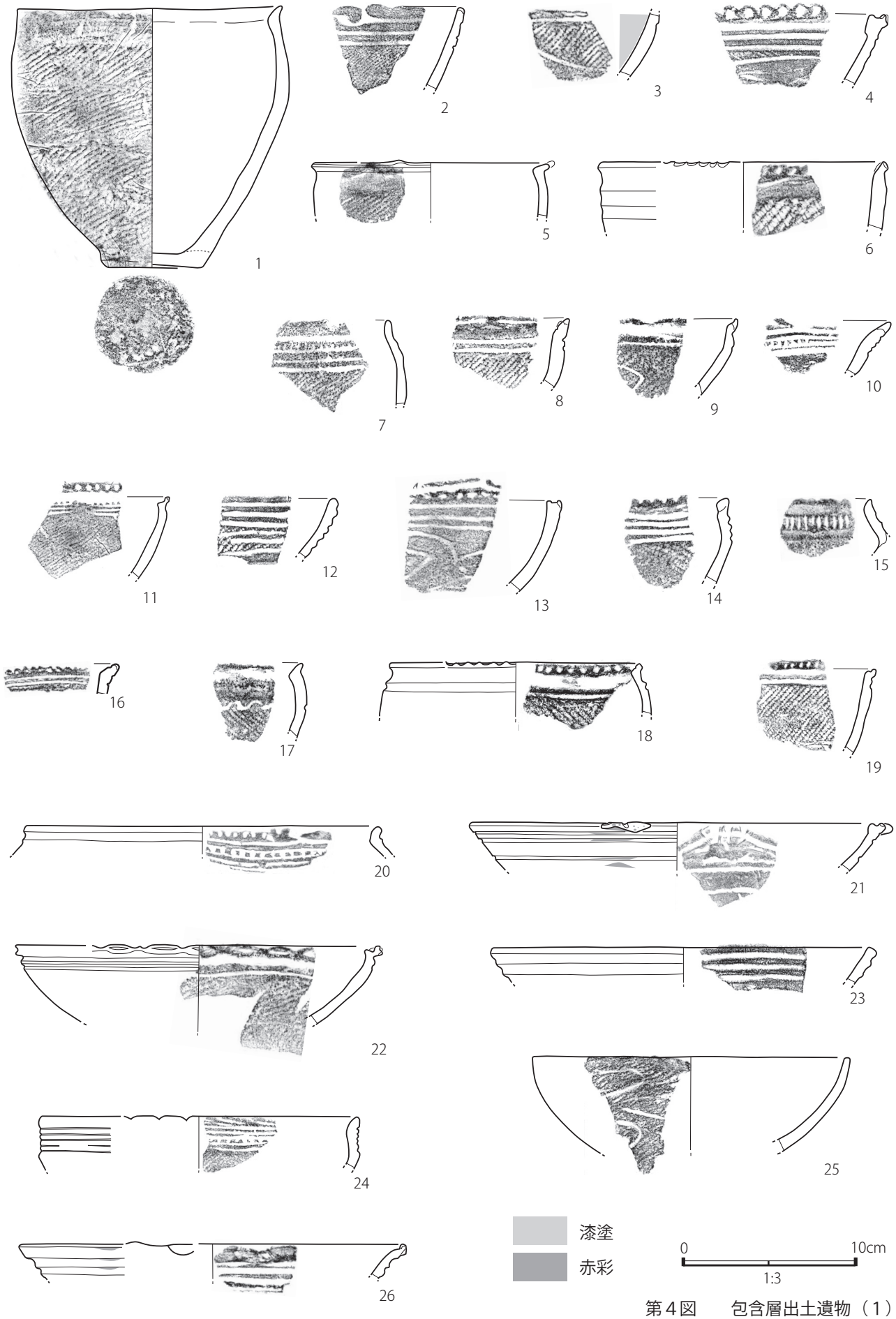
2．赤色顔料（４図 21・26、５図 16、６図６）

の２種類があるが、いずれも壺や注口土器などの精製土器が大半を占める。

ところで、前述のとおり大洞式の土器は精緻な文様と装飾が特徴であるが、同じく大洞式の土器が出土した山形県村山市・宮の前遺跡（山口 1995）の土器と比較すると、岩屋堂遺跡の土器は体部の文様や口縁の装飾について精緻さに欠け粗雑さが目立つ。特に第 5 図３においては頸部の並行沈線の乱れが著しい（註１）。

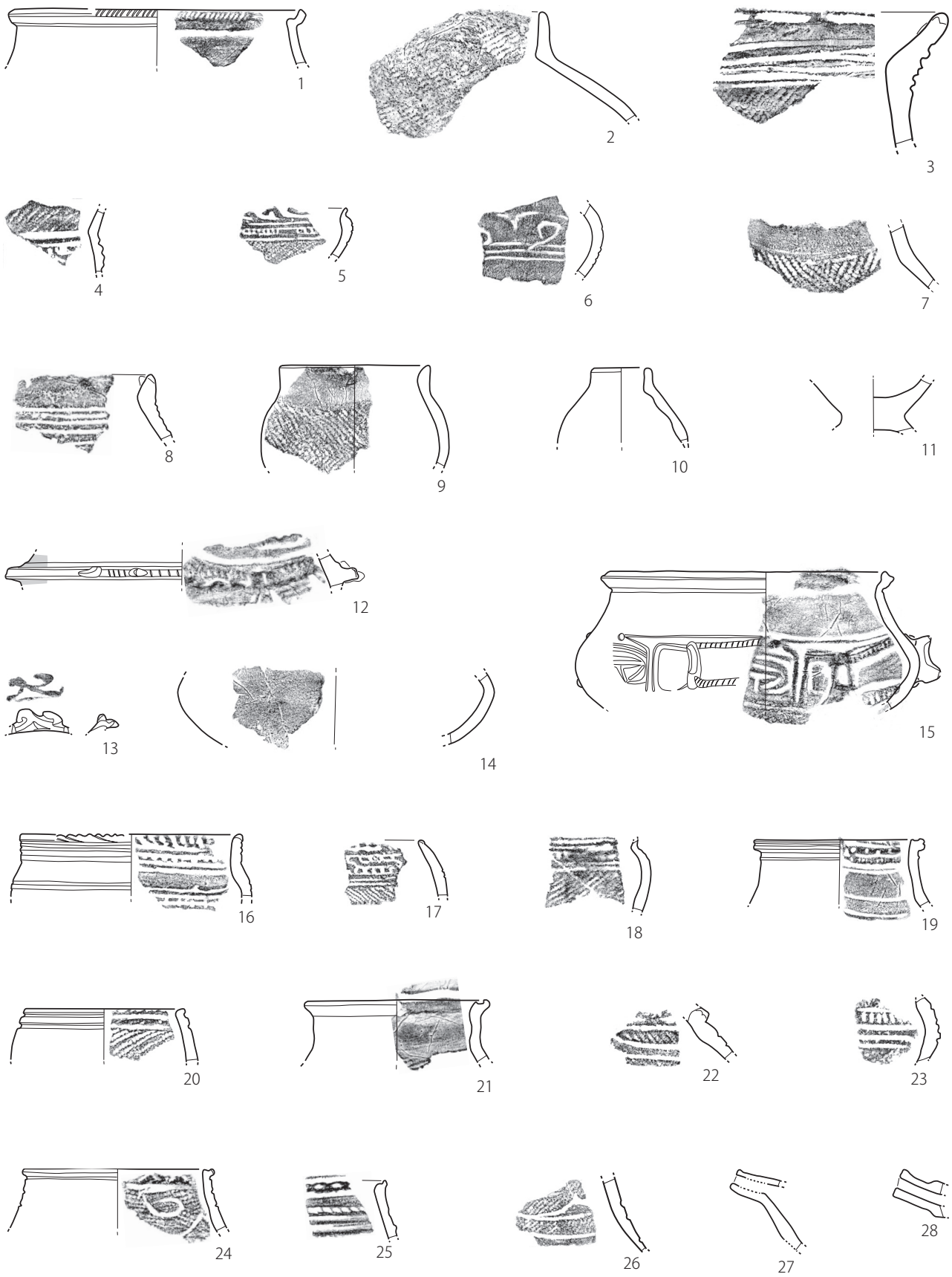
3. まとめ

以上のとおり、本調査の調査区内からは遺構が確認できなったこと、および包含層以外から遺物の出土を確認出来なかったことから、岩屋堂遺跡の範囲は今回の調査区より西側で終了すると思われる。そして、おそらく岩屋堂遺跡範囲内の集落跡が何らかの理由で崩落して、調査区周辺に北西方向から南東方向に向かって土砂とともに土器が流れ込んだものと思われる。出土した土器が大洞 C1 ～ C2 式に属すると思われることからこの周辺には縄文晩期中葉を中心とした集落が存在したものと思われる。しかし、後期後葉の注口土器の注口部（６図 27）や大洞 B ～ BC 式 (晩期前葉）に属するとみられる深鉢（４図２)、大洞 A 式（晩期後葉）に属する壺頸部（６図３）が出土していること



第４図　　包含層出土遺物（１）

第５図　　包含層出土遺物（２）



第６図　　包含層出土遺物（３）

表２　　遺物観察表（１）

図版番号	挿図番号	種別	器種	計測値（mm） 口径	底径	器高	器厚	型式	文様 体部	縄文	口縁	備考
4	1	縄文土器	小型深鉢	151	58	148-	7	大洞 C1~2	磨消縄文　結節撚糸文　粗製土器	LR		胎土に雲母
	2	縄文土器	深鉢	-	-	-	5	大洞 B~BC	磨消縄文　沈線文	LR		胎土に海綿骨針・雲母
	3	縄文土器	深鉢	-	-	-	7	大洞 C1~2	磨消縄文　沈線文	LR		胎土に海綿骨針
	4	縄文土器	浅鉢	-	-	-	6	大洞 C1~2	磨消縄文　並行沈線紋	RL	指頭押圧	胎土に海綿骨針・雲母
	5	縄文土器	深鉢	(136)	-	-	5	大洞 C1~2	磨消縄文	LR		胎土に海綿骨針 内外面炭化物付着
	6	縄文土器	深鉢	(164)	-	-	8	大洞 C1~2	磨消縄文	LR		胎土に雲母
	7	縄文土器	深鉢	-	-	-	5	大洞 C1~2	並行沈線　刻文	LR	刻目文	内面に漆付着
	8	縄文土器	深鉢	-	-	-	8	大洞 C1~2	磨消縄文　並行沈線	LR		
	9	縄文土器	深鉢	-	-	-	6	大洞 C1~2	磨消縄文　沈線文	LR		
	10	縄文土器	深鉢	-	-	-	8	大洞 C1~2	沈線文	-		
	11	縄文土器	深鉢	-	-	-	6	大洞 C1~2	磨消縄文　沈線文	LR		
	12	縄文土器	深鉢	-	-	-	6	大洞 C1~2	磨消縄文　沈線文	LR		胎土に海綿骨針・雲母
	13	縄文土器	深鉢	-	-	-	5	大洞 C1~2	沈線文	-		胎土に海綿骨針・雲母
	14	縄文土器	深鉢	-	-	-	6	大洞 C1~2	磨消縄文　並行沈線文	RL		内面炭化物付着　胎土に雲母
	15	縄文土器	深鉢	-	-	-	6	大洞 C1~2	刻目文	-		胎土に海綿骨針
	16	縄文土器	深鉢	-	-	-	5	大洞 C1~2	並行沈線文	-		胎土に海綿骨針
	17	縄文土器	深鉢	-	-	-	7	大洞 C1~2	磨消縄文　結節撚糸文	RL		胎土に海綿骨針
	18	縄文土器	深鉢	(144)	-	-	4	大洞 C2	磨消縄文　沈線文	LR		胎土に海綿骨針・雲母
	19	縄文土器	深鉢	-	-	-	5	大洞 C2	磨消縄文　結節撚糸文	LR		内面炭化物付着・胎土海綿骨針・雲母
	20	縄文土器	鉢	(206)	-	-	5	大洞 C1	並行沈線紋	-	刻目文	胎土に海綿骨針・雲母
	21	縄文土器	浅鉢	(236)	-	-	5	大洞 C1~2	並行沈線紋	-		赤色加工
	22	縄文土器	浅鉢	(210)	-	-	6	大洞 C1~2	磨消縄文　並行沈線紋	LR		胎土に雲母
	23	縄文土器	浅鉢	(240)	-	-	6	大洞 C1~2	並行沈線紋	-		胎土に海綿骨針
	24	縄文土器	浅鉢	(182)	-	-	5	大洞 C1~2	磨消縄文　並行沈線紋	LR		
	25	縄文土器	浅鉢	(180)	-	-	8	大洞 C1~2	磨消縄文	LR		胎土に雲母
	26	縄文土器	浅鉢	(220)	-	-	6	大洞 C1~2	並行沈線紋	-		赤色加工
5	1	縄文土器	浅鉢	-	-	-	7	大洞 C1	磨消縄文　並行沈線紋	LR		胎土に雲母
	2	縄文土器	浅鉢	-	-	-	7	大洞 C1	磨消縄文　並行沈線紋	LR		胎土に雲母
	3	縄文土器	浅鉢	-	-	-	6	大洞 C1	二溝間の截痕	LR		胎土に海綿骨針・雲母
	4	縄文土器	浅鉢	-	-	-	6	大洞 C1	二溝間の截痕	LR		胎土に海綿骨針・雲母
	5	縄文土器	浅鉢	-	-	-	6	大洞 C1~2	磨消縄文　並行沈線紋	LR		
	6	縄文土器	浅鉢	-	-	-	8	大洞 C1~2	磨消縄文	LR		胎土に海綿骨針・雲母
	7	縄文土器	浅鉢	-	-	-	5	大洞 C1~2	磨消縄文　並行沈線紋	LR		胎土に海綿骨針・雲母
	8	縄文土器	浅鉢	-	-	-	5	大洞 C1~2	条線文？	-	指頭押圧	胎土に雲母
	9	縄文土器	浅鉢	-	-	-	5	大洞 C1~2	磨消縄文　沈線紋	LR		内面に粘土紐貼付・胎土に海綿骨針
	10	縄文土器	浅鉢	-	-	-	5	大洞 C1~2	磨消縄文　並行沈線紋	LR		
	11	縄文土器	浅鉢	-	-	-	5	大洞 C1~2	磨消縄文　並行沈線紋	LR		
	12	縄文土器	浅鉢	-	-	-	5	大洞 C1~2	磨消縄文　沈線紋	LR		胎土に海綿骨針
	13	縄文土器	深鉢	-	-	-	6	大洞 C1~2	磨消縄文　結節撚糸文	LR-		内面に漆付着
	14	縄文土器	深鉢	-	-	-	6	大洞 C1~2	無文　粗製土器	-		
	15	縄文土器	深鉢	-	-	-	6	大洞 C1~2	無文　粗製土器	-		
	16	縄文土器	鉢	-	-	-	6	大洞 C1~2	無文	-		内面赤色加工　胎土に海綿骨針
	17	縄文土器	深鉢	-	-	-	6	大洞 C2	沈線文	-		胎土に海綿骨針
	18	縄文土器	浅鉢	-	-	-	7	大洞 C2	並行沈線紋	-		胎土に海綿骨針
	19	縄文土器	鉢	(180)	-	-	6	大洞 C1~2	磨消縄文　並行沈線紋	LR		
	20	縄文土器	鉢	(220)	-	-	7	大洞 C1~2	磨消縄文　粗製土器	LR		内面漆付着
	21	縄文土器	鉢	(220)	-	-	8	大洞 C1~2	無文　粗製土器	-		
	22	縄文土器	鉢	-	-	-	8	大洞 C1~2	磨消縄文　粗製土器	LR		
	23	縄文土器	小型土器	-	(56)	-	8	大洞 C1~2	無文	-		胎土に雲母
	24	縄文土器	小型土器	-	(50)	-	7	大洞 C1~2	磨消縄文　結節撚糸文	LR		胎土に海綿骨針・雲母
	25	縄文土器	小型土器	-	52	-	6	大洞 C1~2	磨消縄文	RL		
	26	縄文土器	小型土器	-	42	-	7	大洞 C1~2	無文	-		胎土に海綿骨針
6	1	縄文土器	壺	(160)	-	-	6	大洞 C1~2	ミガキ	-	刻目文	内面炭化物付着・胎土海綿骨針・雲母
	2	縄文土器	壺	-	-	-	7	大洞 C1~2	磨消縄文	LR		
	3	縄文土器	壺	-	-	-	8	大洞 A	並行沈線紋	-		胎土に海綿骨針
	4	縄文土器	壺	-	-	-	4	大洞 BC~C1	磨消縄文　羊歯縄文？	LR		
	5	縄文土器	壺	-	-	-	6	大洞 BC~C1	二溝間の截痕　磨消縄文	LR		胎土に海綿骨針

表３　　遺物観察表（２）

図版番号	挿図番号	種別	器種	計測値（mm）口径	底径	器高	器厚	型式	文様 体部	縄文	口縁	備考
	6	縄文土器	壺	-	-	-	6	大洞 C1	並行沈線紋	LR		赤色加工　胎土に海綿骨針
	7	縄文土器	壺	-	-	-	6	大洞 C1~2	磨消縄文	LR・RL		
	8	縄文土器	壺	-	-	-	8	大洞 C1~2	並行沈線紋	-		胎土に海綿骨針
	9	縄文土器	小型壺	(80)	-	-	5	大洞 C1~2	磨消縄文	LR		
	10	縄文土器	小型壺	(34)	-	-	5	大洞 C1~2	無文	-		胎土に海綿骨針
	11	縄文土器	台付鉢？	-	-	-	7	大洞 C1~2	無紋	-		胎土に海綿骨針・雲母
	12	縄文土器	注口土器	-	-	-	6	大洞 C1	肩部　粘土紐貼付け　刻目文	-		胎土に海綿骨針　表面漆塗布
	13	縄文土器	注口土器	-	-	-	5	大洞 C1	肩部	-		胎土に海綿骨針
	14	縄文土器	注口土器	-	-	-	5	大洞 C1~2	磨消縄文？	不明		
	15	縄文土器	注口土器	(150)	-	-	6	大洞 C2 新	粘土紐貼付け　刻目文	LR		胎土に雲母
	16	縄文土器	注口土器	(120)	-	-	6	大洞 BC	並行沈線文　刺突文	-	刻目文	胎土に雲母
6	17	縄文土器	注口土器	-	-	-	6	大洞 BC	羊歯状文　磨消縄文	LR		
	18	縄文土器	注口土器	-	-	-	7	大洞 BC~C1	磨消縄文　二溝間の截痕	LR		
	19	縄文土器	注口土器	(90)	-	-	5	大洞 C1~2	ミガキ	-	並行沈線文	
	20	縄文土器	注口土器	(86)	-	-	5	大洞 C1~2	磨消縄文　並行沈線文	LR	並行沈線文	胎土に海綿骨針・雲母
	21	縄文土器	注口土器	-	-	-	6	大洞 C1~2	磨消縄文	LR		
	22	縄文土器	注口土器	-	-	-	6	大洞 C1~2	磨消縄文　二溝間の截痕	-		
	23	縄文土器	注口土器	-	-	-	7	大洞 C1~2	磨消縄文　沈線文	RL		
	24	縄文土器	注口土器	-	-	-	6	大洞 C2	磨消縄文　沈線文	LR	刻目文	
	25	縄文土器	注口土器		-	-	5	大洞 C2	並行沈線紋　溝底の刺痕	-		
	26	縄文土器	注口土器	-	-	-	5	大洞 C2	磨消縄文　沈線文	LR		胎土に海綿骨針
	27	縄文土器	注口土器	-	-	-	5	後期後葉？	無文	-		
	28	縄文土器	注口土器	-	-	-	5	大洞 C1~2	無文	-		

から、集落の存在時期にやや幅があるかもしれない。南に隣接する加藤屋敷遺跡（氏家・伊藤 2009）では、縄文後期の住居跡や後期の瘤付土器を中心に中期や晩期の土器も混入していることから、時期差のある土器の出土も充分にあり得る。

岩屋堂遺跡は「南陽市史」考古資料編（佐藤 1987）および上巻（佐藤 1990）に記載されているように縄文晩期の遺跡として知られ（第８図）、畑地・水田の耕作土中から土器と石器が出土する散布地として登録されていた[註２]。縄文晩期（大洞 C1・C2・A 式）の土器・石匙・石鏃・石錐・石箆・打製石器・磨製石器・凹石・石製小型玉などが出土している。岩屋堂遺跡の石器の特徴について石鏃の大部分が凸基有茎鏃であり、この周辺の住民は小さく強力な矢を使用して狩猟を行っていたと思われる（佐藤 1990）。

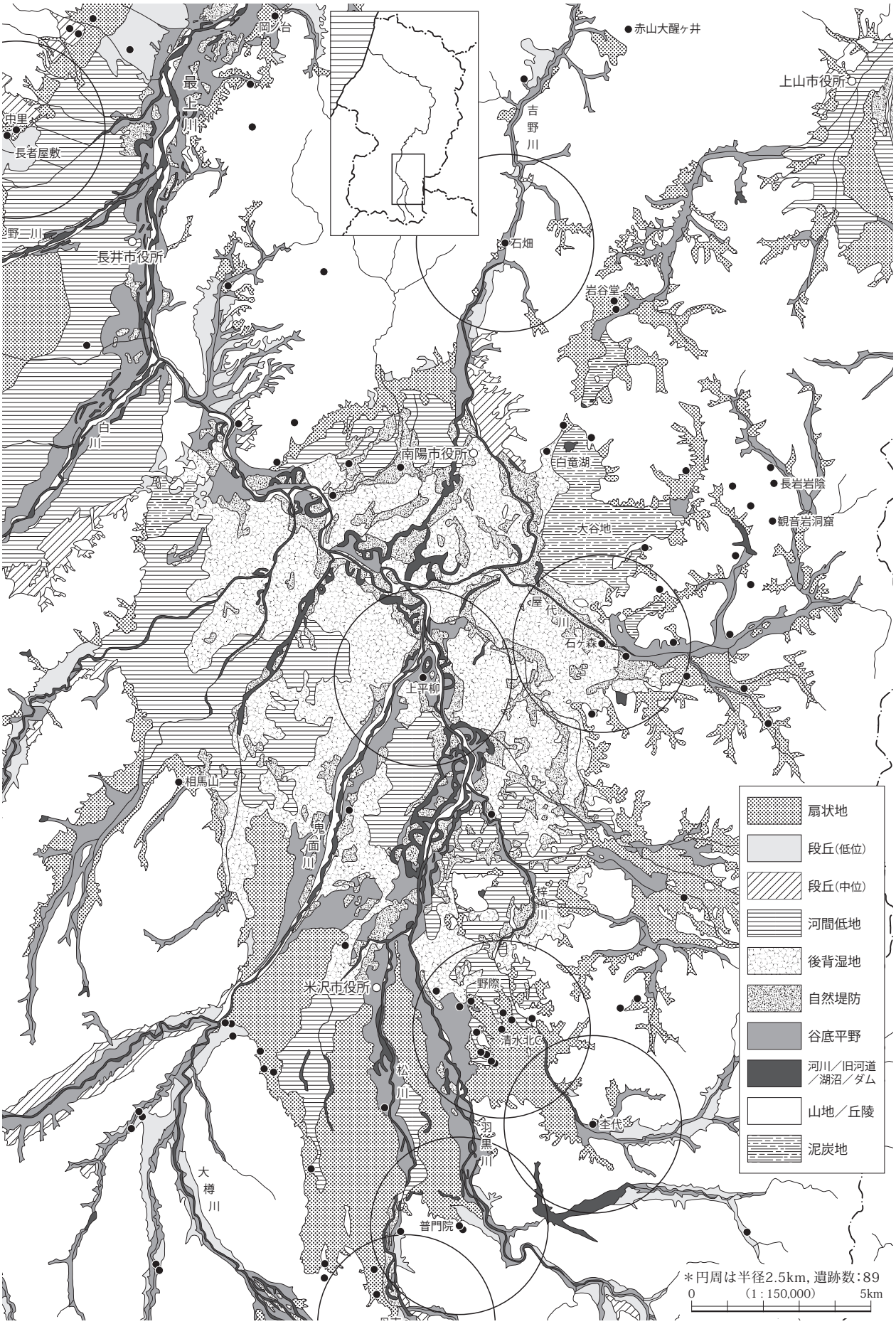
ところで、第７図にあるように米沢盆地では河川沿いの谷底平野や扇状地上を中心に縄文晩期が分布しているが、このうち現在までに報告書が刊行されている縄文晩期の遺跡は南陽市の石畑遺跡（渡辺・押切 2007）のみである。岩屋堂遺跡とは鷹戸山を隔てた吉野川右岸の河岸段丘上に位置する。瘤付土器や大洞 B ～大洞 A 式の土器が出土したことから縄文後期から晩期の集落跡の一部であると報告されている。また石畑遺跡から出土した石器について、石材の硬度の違いを見極め石器を制作し、狩猟用の石器の威力を高めていたことが窺える。

今回岩屋堂遺跡の発掘調査を行った調査区について、包含層からの出土ではあるものの岩屋堂遺跡で使用されていた土器の器種や形状、特徴等を記録・図化することができた。だが一方で石器の出土が皆無であり、その理由は不明である。

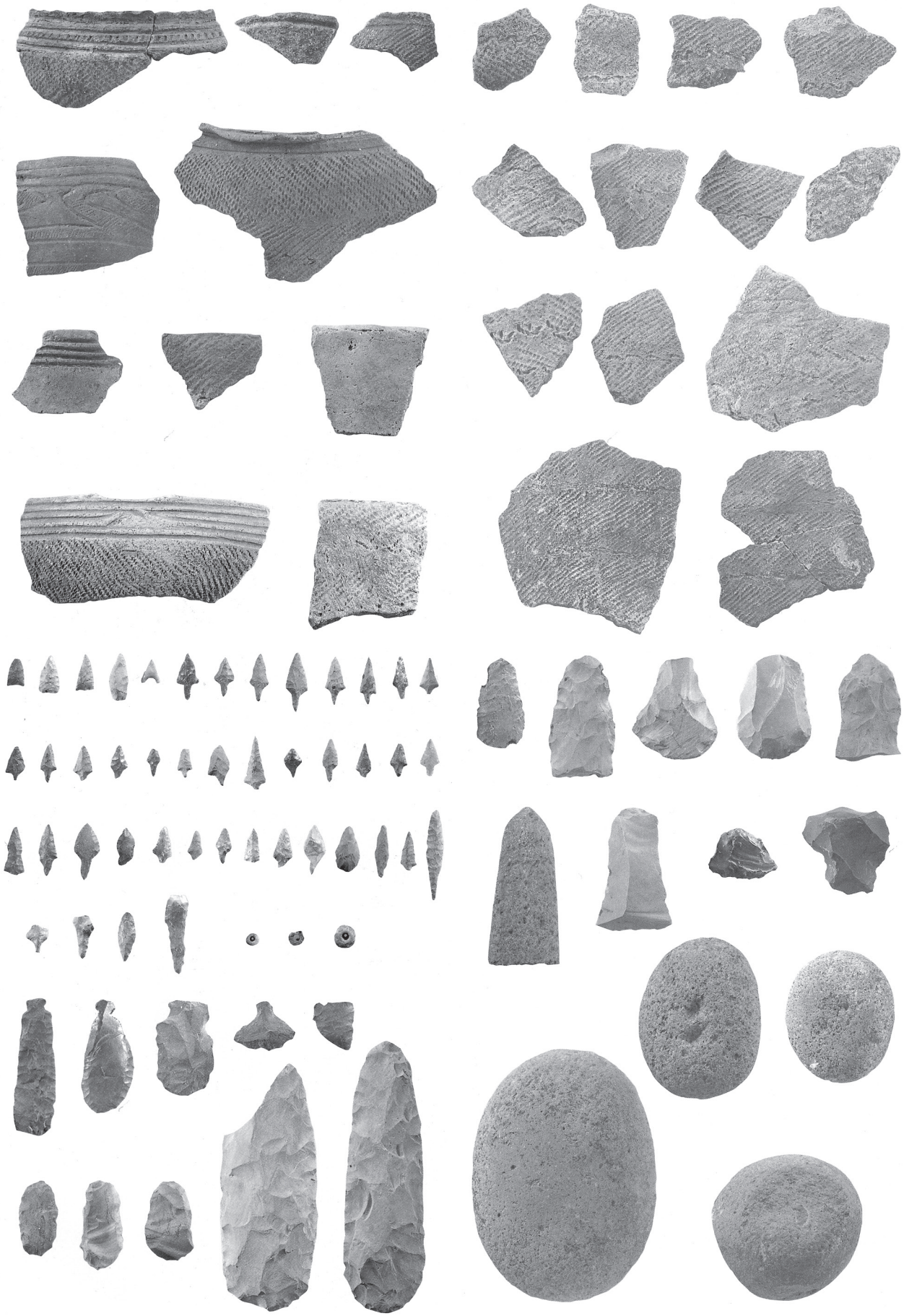
しかし、米沢盆地の縄文晩期の土器文化の片鱗を垣間見られたことをこの発掘調査の成果としたい。

註

（１）出土土器について、小林圭一氏・菅原哲文氏にご教示いただいた。
（２）「南陽市史」掲載遺物は個人蔵である。



第７図　米沢盆地の地形分類と縄文晩期の遺跡分布（小林圭一氏作成）



第８図　岩屋堂遺跡　表採遺物（「南陽市史　考古資料編」より）

引用・参考文献

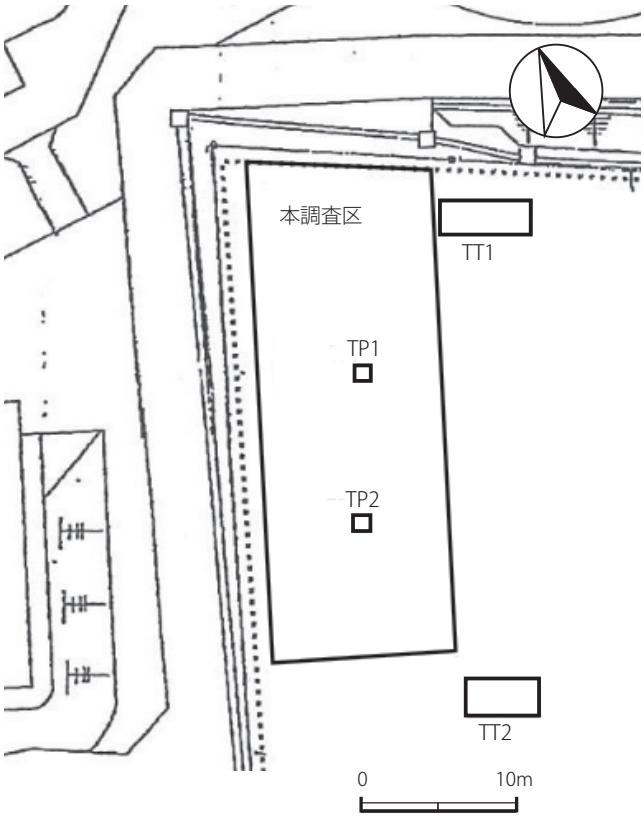
佐藤鎮雄ほか　1987「南陽市史　考古資料編」第Ⅲ章　南陽市史編さん委員会
佐藤鎮雄ほか　1990「南陽市史　上巻」第１章第１節・第２節　第３章第４節　南陽市史編さん委員会
菊地登喜子・前田みゆきほか　1991「南陽市史　中巻」第１章第６節　第３章３　南陽市史編さん委員会
中沢　実ほか　1992「南陽市史　下巻」第５章　南陽市史編さん委員会
戸沢充則　1994「縄文時代研究辞典」東京堂出版
佐藤鎮雄ほか　1995「年表・写真でみる南陽市史」　南陽市史編さん委員会
山口博之　1995「宮の前遺跡第２次発掘調査報告書」『山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 19 集』
加藤次郎衛門・手塚孝ほか　1995「山形県中世城館遺跡調査報告書　第１集（置賜地域）」山形県教育委員会
加藤和徳ほか　1996「山形県中世城館遺跡調査報告書　第２集（村山地区）」山形県教育委員会
川崎利夫ほか　2000「縄文時代・最後の時代」『第９回企画展図録』山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館
川崎利夫ほか　2002「やまがたの縄文土器」『第４回特別展図録』山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館
岩崎義信　2003「右撚り・左撚り－縄文の土器文様と紐の撚り－」『第９回企画展図録』長井市古代の丘資料館
渡辺淳一・押切智紀　2007「石畑遺跡発掘調査報告書」『山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 164 集』
須藤孝弘・氏家信行・伊藤純子　2009「天矢場遺跡発掘調査報告書」『山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 174 集』
氏家信行・伊藤純子　2009「加藤屋敷第１・２次発掘調査報告書」『山形県埋蔵文化財センター調査報告書 179 集』
佐藤鎮雄　2012「中世やまがたの城館 - そこに城館がある理由」山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館
角田朋行　2016「南陽市遺跡分布調査報告書（４）」南陽市埋蔵文化財調査報告書第 14 集
角田朋行　2017「南陽市遺跡分布調査報告書（５）」南陽市埋蔵文化財調査報告書第 15 集

Ⅳ　理化学分析

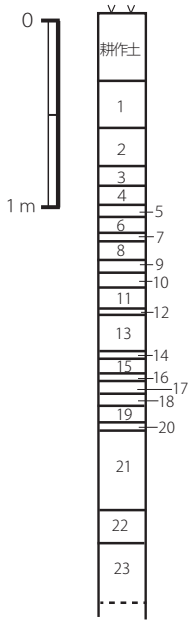
1　南陽市岩屋堂遺跡理化学分析調査

東北芸術工科大学芸術学部　歴史遺産学科
准教授　　長井　謙治

南陽市岩屋堂遺跡（ＴＴ１）出土炭化材、土壌の自然科学分析を行った。縄文時代後期における木材の検出に成功した。樹種同定によりカツラ属・トチノキが検出された。縄文時代後半期における古環境を知るデータを獲得した。



第１図　追加トレンチ配置図　Ｓ＝１/500



TT1
1　暗褐色砂質粘土
2　くすんだ暗褐色砂質粘土
3　褐色粘質砂層（粗砂）
4　灰褐色粘質砂層（細砂）
5　褐色粘質砂層（粗砂）
6　暗灰色粘質砂層
7　褐色粘質砂層（炭混じり）
8　くすんだ褐色砂質粘土
9　暗褐色砂質粘土
10　褐色粘質砂層（粗砂）
11　灰褐色粘土
12　灰色砂質粘土
13　褐色粘質砂礫層
14　暗灰色砂質粘土
15　くすんだ暗褐色砂質粘土
16　暗灰色粘質砂層
17　くすんだ暗褐色粘質砂層
18　暗灰色砂質粘土
19　暗灰色粘質砂層
20　暗灰色砂質粘土
21　暗灰色砂質粘土
22　黒色粘土層（泥炭）
23　オリーブ灰色粘土

第２図　TT1 柱状図　Ｓ＝１/40

※第１図、第２図は角田朋行作成

１．南陽市＿岩屋堂４試料の年代測定

（2016 年９月６日　山形大学 YU-AMS グループ）

平成 28 年度に実施された山形県南陽市川樋での岩屋堂遺跡発掘調査における４試料（写真１）に対して、加速器質量分析法（ＡＭＳ法）による放射性炭素年代測定を行った。

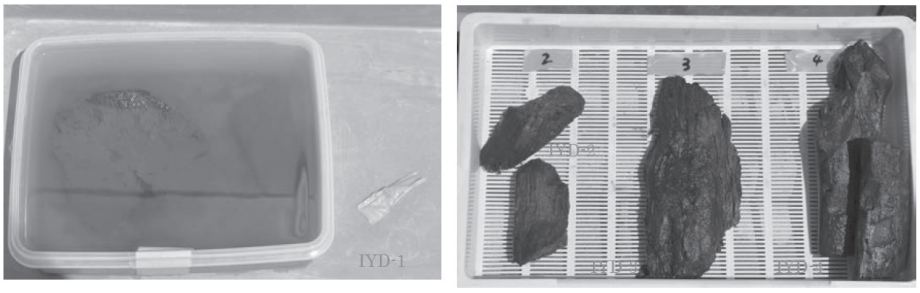


写真１

2．試料と方法

表１に試料情報を示す。測定試料は、元素分析計、質量分析計、ガラス真空ラインより構成されるグラファイト調整システムにてグラファイト化を行った。その後、総合研究所１階に設置した加速器質量分析計（YU-AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて放射性炭素年代を測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C 年代、暦年代を算出した。

ラボコード	測定試料名	試料情報	試料状態	処理
YU-5005	IYD-1	2016/8/25 受取	南陽市　岩屋	超音波洗浄実施（純水、アセトン）
		南陽市　岩屋堂 1/4	堂 1/4 最外皮	AAA 処理
		最外皮 5	5	1M HCl 80 度 1 時間
		木片試料	木片試料	1M NaOH 80 度 1 時間（2 回）
		IYD-1	IYD-1	1M HCl 80 度 1 時間
			サンプル	
			2.893mg 使用	
YU-5006	IYD-2	2016/8/25 受取	南陽市　岩屋	超音波洗浄実施（純水、アセトン）
		南陽市　岩屋堂 2/4	堂 2/4 最外皮	AAA 処理
		最外皮 1 ～ 2	1 ～ 2	1M HCl 80 度 1 時間
		木片試料	木片試料	1M NaOH 80 度 1 時間（2 回）
		IYD-2	IYD-2	1M HCl 80 度 1 時間
			サンプル	
			2.796mg 使用	
YU-5007	IYD-3	2016/8/25 受取	南陽市　岩屋	超音波洗浄実施（純水、アセトン）
		南陽市　岩屋堂 3/4	堂 3/4 最外皮	AAA 処理
		最外皮 1 ～ 5	1 ～ 5	1M HCl 80 度 1 時間
		木片試料	木片試料	1M NaOH 80 度 1 時間（2 回）
		IYD-3	IYD-3	1M HCl 80 度 1 時間
			サンプル	
			2.873mg 使用	
YU-5008	IYD-4	2016/8/25 受取	南陽市　岩屋	超音波洗浄実施（純水、アセトン）
		南陽市　岩屋堂 4/4	堂 4/4 最外皮	AAA 処理
		最外皮 1 ～ 5	1 ～ 5	1M HCl 80 度 1 時間
		木片試料	木片試料	1M NaOH 80 度 1 時間（2
		IYD-4	IYD-4	
			サンプル	
			2.593mg 使用	

表１

3．結果

表２に、サンプルの放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果を示す。同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ^{13}C）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲を示す。暦年較正に用いた年代値は下１桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

測定番号	試料名	δ^{13}C	暦年較正用年代	^{14}C 年代	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
		(‰)	(yrBP ± 1 σ)	(yrBP ± 1 σ)	1 σ暦年代範囲	2 σ暦年代範囲
YU-5005	IYD-1	-27.23 ± 0.31	3549 ± 20	3550 ± 20	1932BC (68.2%) 1881BC	1951BC (78.0%) 1872BC
						1845BC (10.7%) 1813BC
						1801BC (6.7%) 1778BC
YU-5006	IYD-2	-27.21 ± 0.40	3566 ± 21	3565 ± 20	1939BC (68.2%) 1891BC	2010BC (1.3%) 2000BC
						1977BC (92.4%) 1878BC
						1839BC (1.6%) 1828BC
YU-5007	IYD-3	-25.32 ± 0.25	3570 ± 20	3570 ± 20	1941BC (68.2%) 1893BC	2010BC (1.5%) 2001BC
						1976BC (93.9%) 1881BC
YU-5008	IYD-4	-26.55 ± 0.31	3566 ± 21	3565 ± 20	1939BC (68.2%) 1891BC	2010BC (1.3%) 2000BC
						1977BC (92.4%) 1878BC
						1839BC (1.6%) 1828BC

表２

＝＝＝ 年代測定の考え方 ＝＝＝＝

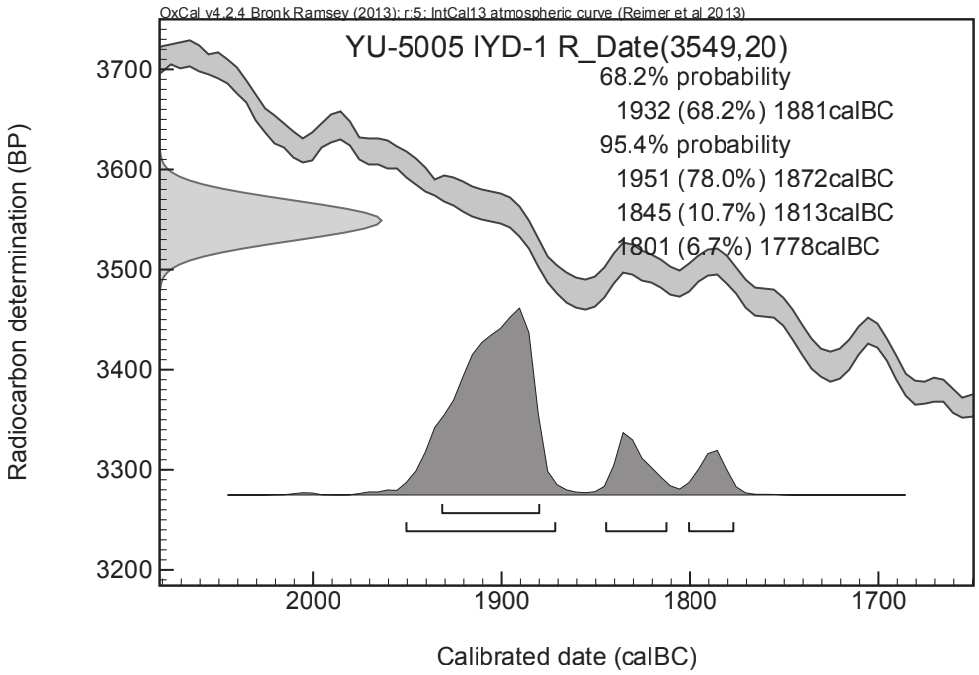
^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C 年代（yrBP）の算出には、^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差（± 1 σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2％であることを示す。

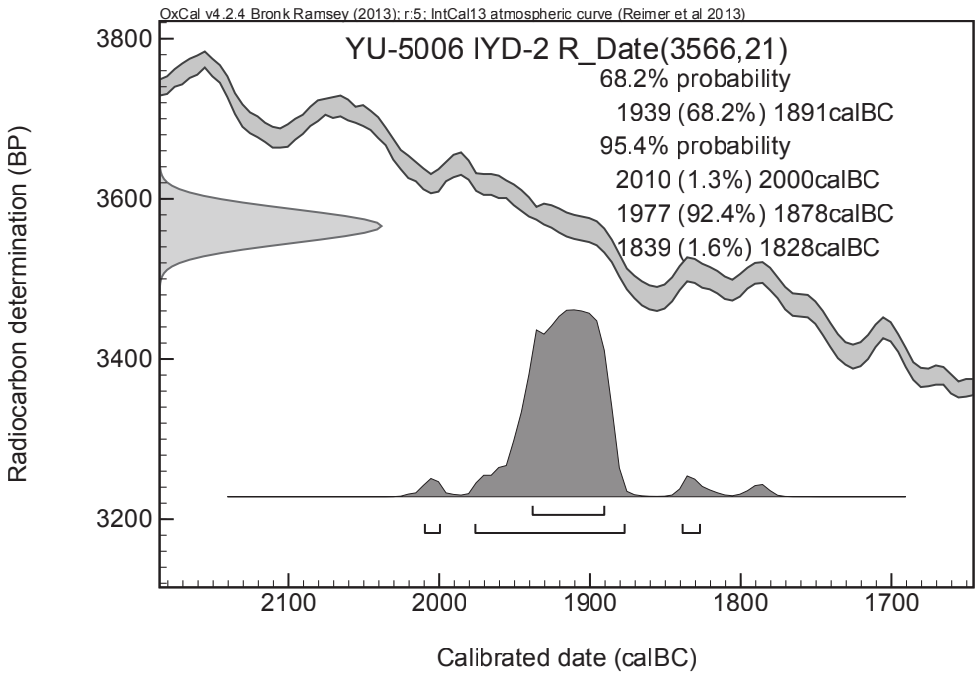
なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い（^{14}C の半減期 5730 ± 40 年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.2[1]（較正曲線データ：Intcal13[2] を使用した。なお、1 σ暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2％信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2 σ暦年代範囲は 95.4％信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

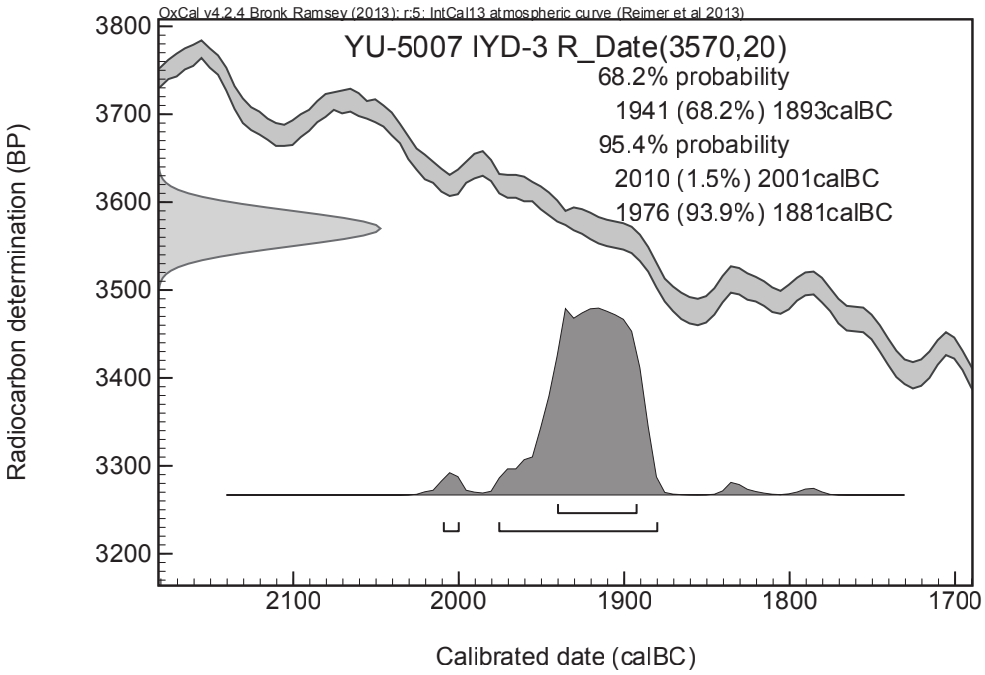
参考文献

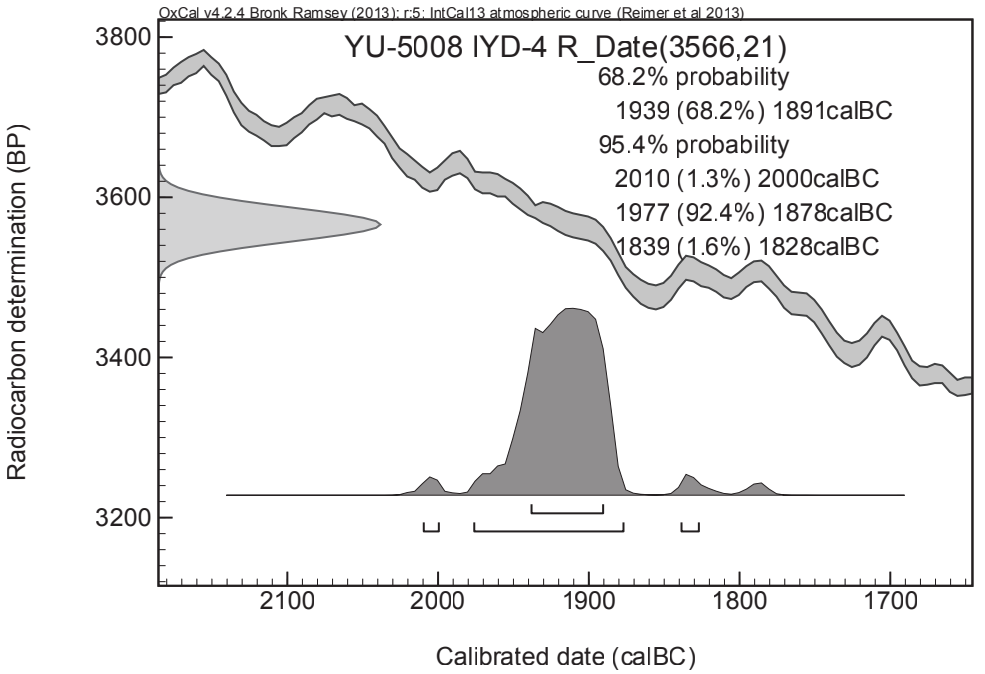
１）Bronk Ramsey, C. (2009). Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.

２）Paula J Reimer, Edouard Bard, Alex Bayliss, J Warren Beck, Paul G Blackwell, Christopher Bronk Ramsey, Caitlin E Buck, Hai Cheng, R Lawrence Edwards, Michael Friedrich, Pieter M Grootes, Thomas P Guilderson, Haflidi Haflidason, Irka Hajdas, Christine Hatté, Timothy J Heaton, Dirk L Hoffmann, Alan G Hogg, Konrad A Hughen, K Felix Kaiser, Bernd Kromer, Sturt W Manning, Mu Niu, Ron W Reimer, David A Richards, E Marian Scott, John R Southon, Richard A Staff, Christian S M Turney, Johannes van der Plicht, (2013), IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0–50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55 (4), 1869-1887.


OxCal v4.2.4 Bronk Ramsey (2013); r:5; IntCal13 atmospheric curve (Reimer et al 2013)
YU-5005 IYD-1 R_Date(3549,20)
68.2% probability
1932 (68.2%) 1881calBC
95.4% probability
1951 (78.0%) 1872calBC
1845 (10.7%) 1813calBC
1801 (6.7%) 1778calBC
Radiocarbon determination (BP)
3700
3600
3500
3400
3300
3200
2000
1900
1800
1700
Calibrated date (calBC)


OxCal v4.2.4 Bronk Ramsey (2013); r:5; IntCal13 atmospheric curve (Reimer et al 2013)
YU-5006 IYD-2 R_Date(3566,21)
68.2% probability
1939 (68.2%) 1891calBC
95.4% probability
2010 (1.3%) 2000calBC
1977 (92.4%) 1878calBC
1839 (1.6%) 1828calBC
Radiocarbon determination (BP)
3800
3600
3400
3200
2100
2000
1900
1800
1700
Calibrated date (calBC)


OxCal v4.2.4 Bronk Ramsey (2013); r:5; IntCal13 atmospheric curve (Reimer et al 2013)
YU-5007 IYD-3 R_Date(3570,20)
68.2% probability
1941 (68.2%) 1893calBC
95.4% probability
2010 (1.5%) 2001calBC
1976 (93.9%) 1881calBC
Radiocarbon determination (BP)
3800
3700
3600
3500
3400
3300
3200
2100
2000
1900
1800
1700
Calibrated date (calBC)


OxCal v4.2.4 Bronk Ramsey (2013); r:5; IntCal13 atmospheric curve (Reimer et al 2013)
YU-5008 IYD-4 R_Date(3566,21)
68.2% probability
1939 (68.2%) 1891calBC
95.4% probability
2010 (1.3%) 2000calBC
1977 (92.4%) 1878calBC
1839 (1.6%) 1828calBC
Radiocarbon determination (BP)
3800
3600
3400
3200
2100
2000
1900
1800
1700
Calibrated date (calBC)

2　岩屋堂遺跡出土木材の樹種同定

小林克也（パレオ・ラボ）

1. はじめに

山形県南陽市に所在する岩屋堂遺跡から出土した木材の樹種同定を行った。

2. 試料と方法

試料は、岩屋堂遺跡の TT1 第 22 層中から出土した木材 4 点である。樹種同定は、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柾目）について、カミソリで薄い切片を切り出し、ガムクロラールで封入して永久プレパラートを作製した。その後乾燥させ、光学顕微鏡にて検鏡および写真撮影を行なった。

3. 結果

同定の結果、試料は広葉樹のカツラ属 2 点とトチノキ 2 点であった。同定結果を表 1 に示す。

次に、同定された材の特徴を記載し、図版に光学顕微鏡写真を示す。

(1) カツラ属　Cercidiphyllum　カツラ科　図版 1　1a-1c(No.4)

小型の道管がほぼ単独で密に散在する散孔材である。道管は 10 ～ 20 段程度の階段穿孔を有し、道管要素の末尾にらせん肥厚が確認できる。放射組織は上下端 1 ～ 3 個が直立する異性で、幅 1 ～ 2 列となる。

表 1　岩屋堂遺跡出土木材の樹種同定

試料 No.	出土層位	器種	樹種
1	25 層中	自然木	トチノキ
2	25 層中	自然木	カツラ属
3	25 層中	自然木	トチノキ
4	25 層中	自然木	カツラ属

カツラ属にはカツラとヒロハカツラがある。代表的なカツラは温帯の谷筋の肥沃な土地に生える日本固有種で、落葉高木の広葉樹である。材は軽軟で、切削加工は容易である。

(2) トチノキ　Aesculus turbinata Blume　ムクロジ科　図版 1　2a-2c(No.1)、3a-3c(No.3)

小型の道管が単独ないし 2 ～ 3 個複合し、やや密に散在する散孔材である。道管は単穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は同性で単列である。また、放射組織は層階状に配列する。

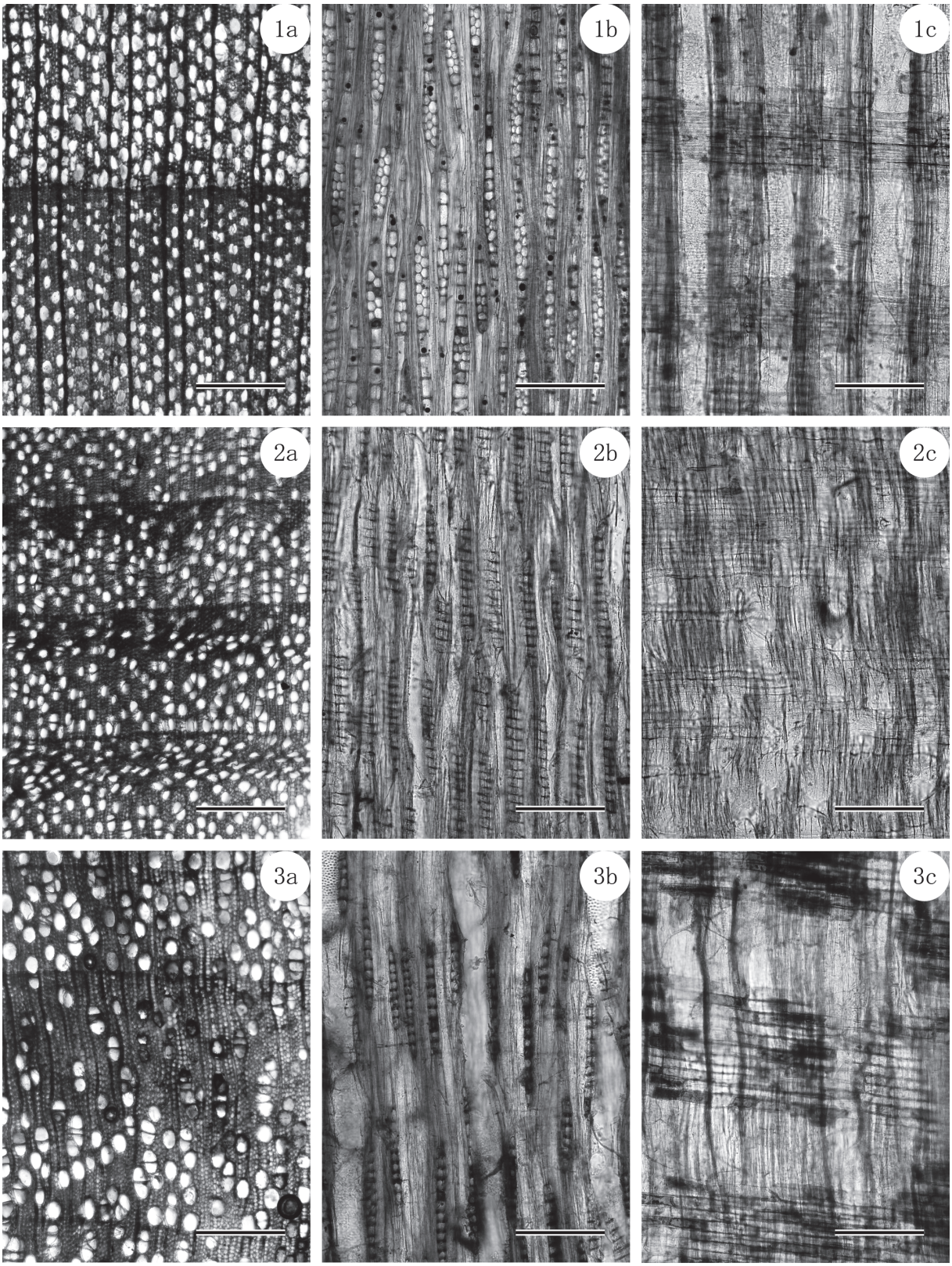
トチノキの分布の北限は北海道南部で、九州まで広く分布するが、東北に多くみられる落葉高木の広葉樹である。材はやや軽軟で、切削加工は極めて容易である。

4. 考察

試料はカツラ属 2 点とトチノキ 2 点であった。カツラ属とトチノキは、共に沢沿いなどの肥沃な場所に生育しやすい樹種であり（伊東ほか，2011）、遺跡周辺の肥沃な場所に生育していたと考えられる。

引用文献

伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂（2011）日本有用樹木誌，238p，海青社.

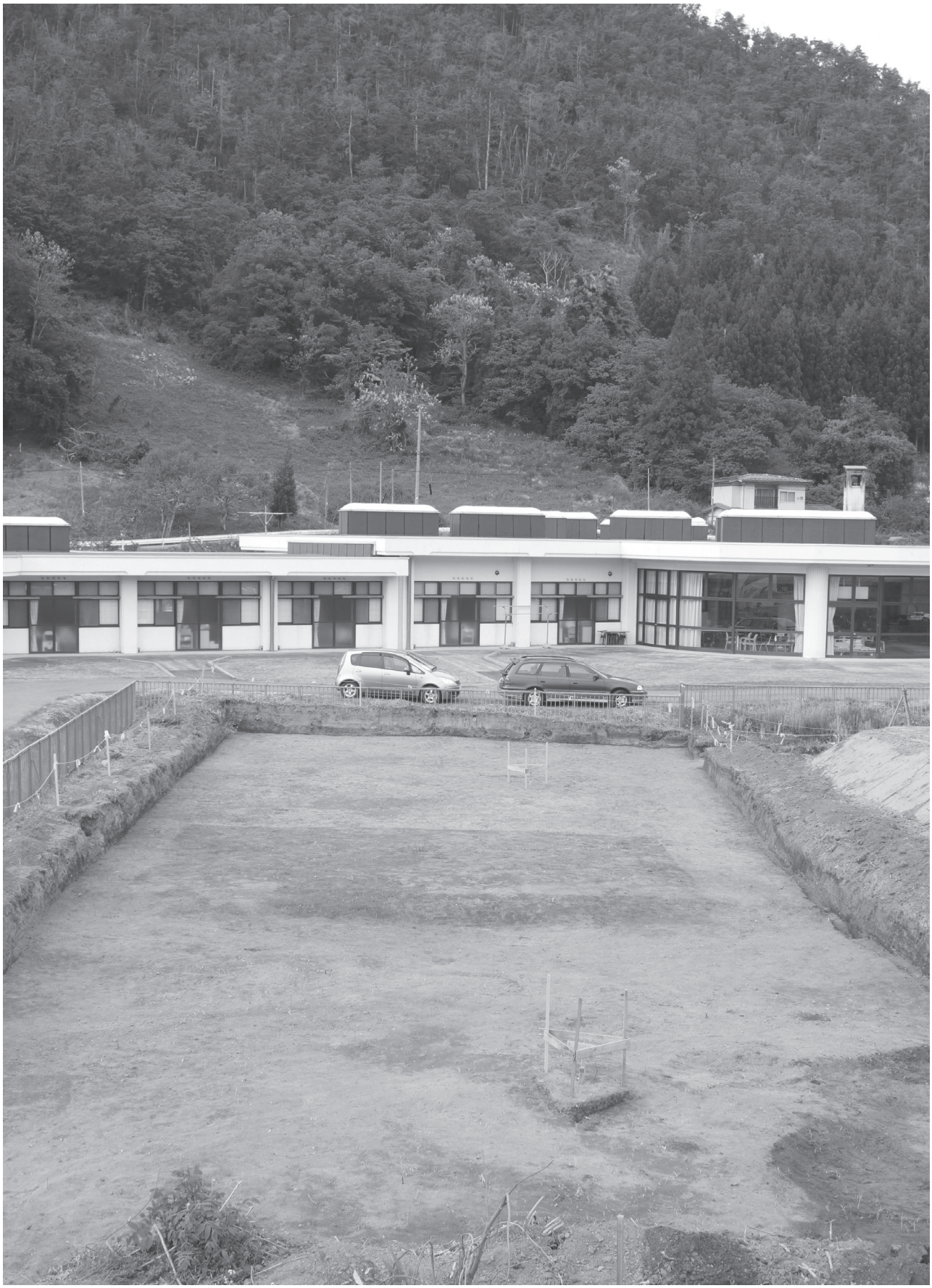


図版1　岩屋堂遺跡出土木材の光学顕微鏡写真

1a-1c.カツラ属(No.4)、2a-2c.トチノキ(No.1)、3a-3c.トチノキ(No.3)

a:横断面(スケール=500 μm)、b:接線断面(スケール=200 μm)、c:放射断面(スケール=200 μm)

写 真 図 版



岩屋堂遺跡完掘状況（南東より）

面整理作業状況（南東より）

遺物出土状況（南より）

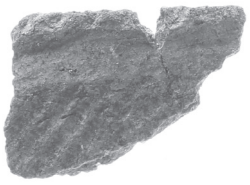
4図1

4図2

4図3

4図4

4図5



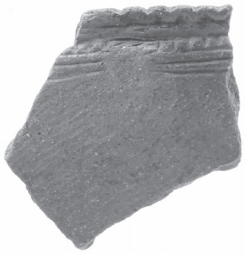
4図6

4図7

4図8

4図9

4図10



4図11

4図12

4図13

包含層出土遺物（1）

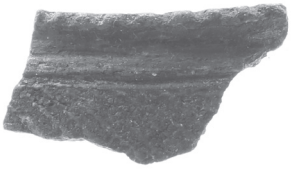
写真図版3

4図 14

4図 15

4図 16

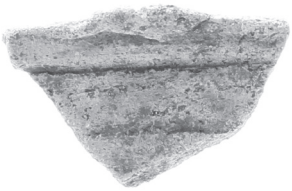
4図 17



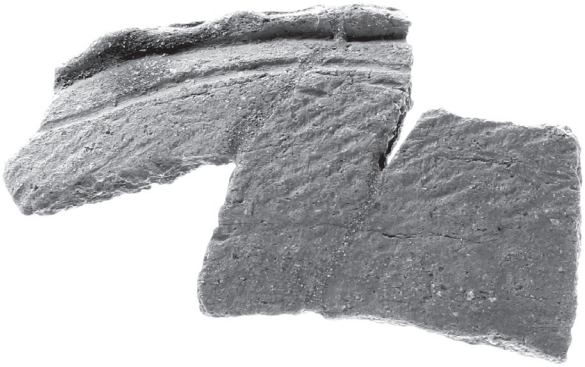
4図 18

4図 19

4図 20



4図 21



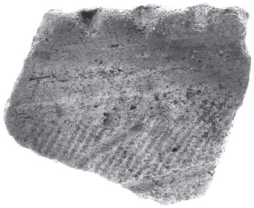
4図 22

4図 23

4図 24

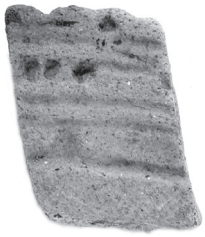
4図 25

4図 26



5図 1

5図 2



5図 3

5図 4

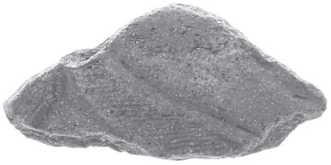
包含層出土遺物（2）

写真図版 4

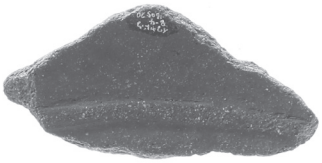
5図5

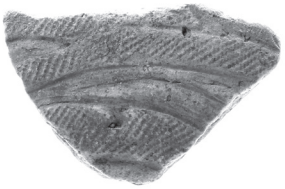
5図8

5図7



5図9

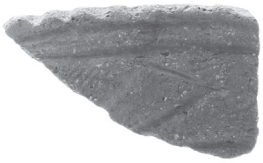




5図6

5図10

5図11



5図12

5図13

5図14

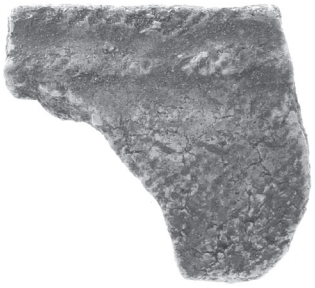
5図16

5図15

5図17

5図18

5図22



5図19

5図20

5図21

包含層出土遺物（3）

写真図版5

5図23

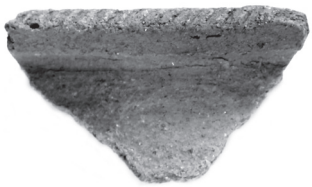
5図24

5図25

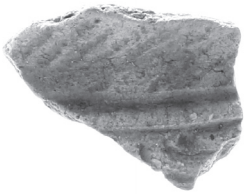
5図26

6図2

6図3



6図1



6図4

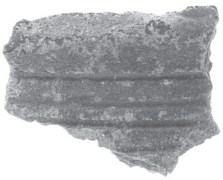
6図5

6図6

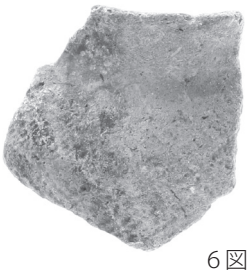
包含層出土遺物（4）

写真図版6

6図7



6図8



6図9

6図10

6図11

6図12

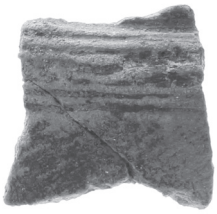
6図13

6図14

6図15

6図16

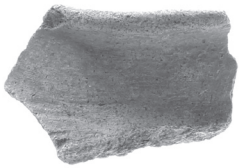
6図17



6図18

6図19

6図20

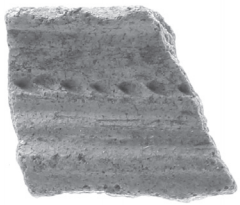


6図21

6図22

6図23

6図24



6図25

6図26

6図27

6図28

包含層出土遺物（6）

報告書抄録

ふ り が な	いわやどういせきはっくつちょうさほうこくしょ
書　　名	岩屋堂遺跡発掘調査報告書
副 書 名	
巻　　次	
シ リ ー ズ 名	南陽市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第 17 集
編 著 者 名	吉田江美子
編 集 機 関	南陽市教育委員会
所　在　地	〒 999-2292　山形県南陽市三間通 436 番地 1　ＴＥＬ 0238-40-3211
発 行 年 月 日	2018 年 3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °　′　″	東経 °　′　″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
いわやどういせき 岩屋堂遺跡	やまがたけん 山形県 なんようし 南陽市 かわだい 川樋 岩屋堂	6213	024	38° 05′ 06″	140° 14′ 11″	20160515 ～ 20160520	800	特別養護老人ホーム施設造成工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
いわやどういせき 岩屋堂遺跡	散布地	縄文時代		縄文土器	調査区範囲からは遺構は発見されなかった。晩期を中心とする縄文土器が包含層から多量に出土した。

要　約	本遺跡は南陽市の東端で上山市境にも近い中川地区の緩斜面上に位置する。ＪＲ奥羽本線中川駅から西へ約 1 ㎞の所にあり、また国道 13 号線が遺跡の南側を縦走するなど現代の交通の要所に隣接している。調査区は特別老人ホーム敷地内でも低地部分にあたる。遺構は確認されなかったが、流れ込みと思われる縄文晩期（大洞式）の土器が大量に出土し、米沢盆地のこの時期の土器の特徴を知る手掛かりとなりうる。

南陽市埋蔵文化財調査報告書第 17 集

岩屋堂遺跡

2018 年 3 月 31 日

発行　南陽市教育委員会
〒 999-2292　山形県南陽市三間通 436 番地 1
電話　0238-40-3211 ㈹
印刷　南陽印刷株式会社
〒 999-2231　山形県南陽市二色根 5 番 11 号
電話　0238-43-3028